

大府市議会

議長 鷹羽琴美 様

大府市議会厚生文教委員会

委員長 野北孝治

## 報告書

～高齢者の外出機会の創出について～

令和7年5月

大府市議会 厚生文教委員会

## 1 はじめに

当委員会は、令和6年6月14日、本市における高齢者の外出機会について、現状及び課題を把握し、今後の市政運営に生かすため、所管事務調査として「高齢者の外出機会の創出について」の調査を行うことに決定し、以降、閉会中を中心に調査を行ってきた。

このたび、調査研究の成果を取りまとめたので、その内容を以下のとおり報告する。

## 2 調査研究テーマの選定理由

テーマ選定の議論において、各委員の体験談から共有したのは、高齢者の外出機会が減少すると精神的に不安定になったり、食事が不規則になったりするなど、心身の健康面に悪い影響を及ぼすということである。具体的には、認知機能の低下や骨粗しょう症などの病気が進行する可能性があることが懸念され、この課題解決は大変重要であることが認識できた。

一般論として、高齢者が積極的に外出することは、心身の健康に良い影響を与えていると言われており、その結果、介護や医療などに係るコストの削減にもつながるとされている。さらに、外出することによる消費の拡大などを通じて、地域経済の活性化にも寄与することが期待される。

当委員会では、多くの高齢者が様々な活動に積極的に参加し、元気に活躍できる大府市を実現するためには、どのような働き掛けやきっかけづくり等が必要かを中心に考えていくこととし、令和6年度の調査研究テーマを「高齢者の外出機会の創出について」とした。

## 3 調査研究の概要

### (1) 福祉部（地域福祉課、高齢障がい支援課）との勉強会

高齢者の外出機会の創出について、委員全員の共通理解を深めることを目的として、福祉部長、地域福祉課長及び高齢障がい支援課長を講師とした勉強会を開催した。

#### 本市が実施している高齢者の外出機会の創出に関する施策や役割など

- ・ 高齢者が積極的に外出することは、健康維持や社会参加の促進、孤立防止など多くの面で効果があると思っている。
- ・ 高齢者の移動手段の確保として、ふれあいバスの拡充やタクシー料金助成の充実を図っている。また、モデル事業として、北尾地区、近崎地区とスーパーマーケットの間を運行する「買い物送迎サポート定期便」への助成を開始した。
- ・ 高齢者の利用が多い常設サロンや全世代型サロンについては、「サロン代表者連絡会議」を定期的に開催して、継続運営できるようにしている。また、後継者不足への対応として、至学館大学の学生ボランティアへの協力依頼や、サロンサポーター応援講座を開催するなどして担い手の確保に努めている。
- ・ 高齢者の引きこもりについては、関係機関と連携して現状を把握し、本人に合った対応を進めていく。介入を拒否するケースが多いため、少しでも不安を解消すべく生活面

や経済面の支援などを行い、社会参加と精神的な健康維持を促している。

- ・高齢者のイベント参加を促すには、送迎サービスの提供が有効である。また、午前中や昼の時間帯など高齢者の生活リズムに合わせた開催時間に設定している。
- ・各自の趣味や興味があるものには参加してもらえるため、事前のPRと様々なイベントを検討している。イベント内での交流で友達ができると継続的な参加意欲につながるため、フレンドリーな対応を心掛けている。

### 委員からの主な意見

- ・外出機会の創出は、健康維持・社会参加の促進・孤立防止に効果があり、市としても重要な課題と捉えている。
- ・社会福祉協議会や市内の民間福祉施設と連携をして、外出につながるような様々な取組が行われている。
- ・人の役に立っている、人に感謝されていると実感できる機会を得ることができる場の創出が必要だと感じた。
- ・仕事をしている人の地域活動への参加は、定年退職が一つのきっかけとなるが、既に活動している団体やグループに入るにはハードルが高いと感じることもある。
- ・外出機会の創出といっても、それぞれできっかけも違うし、希望する趣味や活動内容も違う。多様性に対応するためには、様々な仕掛けや仕組みが必要だと感じた。
- ・移動手段の確保は重要である。

## (2) 大府市社会福祉協議会との情報交換会

調査研究を行うに当たり、大府市の高齢者の外出機会の現状を知るために、高齢者が通うサロン等を運営している大府市社会福祉協議会との情報交換会を開催し、高齢者を取り巻く現状や課題を把握し、委員間で意見交換を行った。

### 大府市社会福祉協議会が実施している高齢者の外出機会の創出に関する取組

日本老年学的評価研究が行っている「健康とくらしの調査」から、大府市の特徴として、高齢者の地域活動への参加率が非常に高いことや、これに相関するように幸福と感じる率が高いことが判明している。

その理由として、大府市には公民館、児童老人福祉センターなどの公共施設を拠点に、団体活動が多く展開されており、多様な参加環境が整っていると同時に、自治区・コミュニティなどの地域組織、老人クラブ、婦人会などによる生きがいつくりや、仲間づくりの活動も活発であり、高齢者の社会参加の要素が多くあることが要因であると考えられる。

高齢者へ参加を促すために、関係者による勧誘、周知チラシの自治区回覧、行政・関係機関・団体からの紹介、民生委員・老人クラブによる参加の働き掛け、地域づくりコーディネーターによるコーディネートなど、幅広くアプローチを行っている。

高齢化が進展している自治会では、地域づくりコーディネーターが介入し、自治会関

係者、民生委員、老人クラブ、地域住民などの関係者と連携し、ふれあいサロンなどの居場所づくりや買物支援などを行っており、丁寧に住民への働き掛けを行っている。

### 委員からの主な意見

- ・大府市は、他市町と比べても自治会や老人クラブなどを中心とした生きがいづくり、仲間づくりが活発に行われていると感じた。
- ・サロンなどの活動が地域で定着しているが、運営スタッフの高齢化が進み、継続という点では不安が残る。
- ・50代や60代の元気なうちに、地域活動に参加できるような組織を形成することが必要だと思う。
- ・多様な活動を進めるために、資金面を含めた様々な支援が必要であると感じた。
- ・地域活動などへの参加を拒むケースでも、粘り強く丁寧に声掛けを継続することで、「参加してみよう」という気持ちになったとのことだが、現実には難しいと感じる。
- ・昔は、老人は敬うもの（尊敬）であったが、現代では「老害」など、悪いイメージを持たれることも多い。

### (3) 民生委員へのアンケート

高齢者と行政との橋渡し役として、日頃から高齢者との接点のある民生委員の役員の方に、アンケート調査に協力していただいた。主なアンケート結果は、以下のとおりである。

- ① 閉じこもりがちな高齢者の特徴（外出を控える理由）はどうか。
  - ・人と会うのが苦手である。
  - ・外出が好きではない。外出を要しない趣味を持っている。
  - ・足が不自由で、気軽に外出できない。
- ② 閉じこもりがちな高齢者の特徴（生活に関する共通点）はどうか。
  - ・買物等の必要な外出はできる。
  - ・サロンへの参加等の社会参加が外出の動機になりにくい人も多い。
  - ・タクシーの手配を提案したこともあったが、タクシー利用が当たり前にならず、サロン等へ行く交通手段としては躊躇する高齢者も多い。
- ③ 閉じこもりがちな高齢者に対して、どのようなきっかけや出来事があれば外出につながると思うか。
  - ・交通手段などを考える必要がないほど近くに気軽に集える場があれば、外出される方は増えると思う。
  - ・老人クラブに参加していなかった方に会員から声をかけたところ、とても熱心に参加されるようになったという話を聞いた。会員などから直接、「あなたに参加してほしい」、「あなたが必要だ」と伝えてみると、意外と参加される方もいるのではないかと思う。

## 委員からの主な意見

- ・できるだけ身近なところに集える場所が必要だと感じた。
- ・誰かに必要とされていることがわかると、行動や継続につながると思った。
- ・人と関わることが苦手な人へのアプローチは、個人の心情にも大きく関わってくるため非常に難しいと感じた。
- ・高齢者との関わりを持てるように時間を掛けて距離を縮めている活動から、民生委員の苦勞を垣間見ることができた。

## (4) 行政視察

高齢者の外出機会の創出についての先進的な取組を学ぶために、県外行政視察を行った。

### ①大阪府堺市「介護予防『あ・し・た』プロジェクトについて」

堺市では、これまでも介護予防教室や啓発活動を行ってきたが、参加者層の固定化やプログラムのマンネリ化など、従来の介護予防施策のみでは対応できない課題があり、より効果的な取組が必要となった。

そこで、PFS（※注1）を導入し、高齢者がいつまでも元気に安心して自立した生活を維持することができるよう、「あるく（身体活動）」、「しゃべる（社会参加）」及び「たべる（食生活）」に関する多彩な介護予防に資する行動変容を促す、介護予防「あ・し・た」プロジェクトを実施している。

参加者の拡大と活動の継続のための「きっかけづくりプログラム」、多様な趣味や学びに対応するための本格的な「学びのプログラム」、その活動を披露する機会となる「活躍の場プログラム」を実施している。事業期間中にこの流れを3クールづくり、継続性につながるように工夫している。

## 委員からの主な意見

- ・民間委託にシフトしたことにより、行政だけでは考え付かない取組を実施し、従来の介護予防事業の課題解決につながっている。
- ・事業の成果によって委託料が変動することで、受託企業がよりよい結果を出すために、今まで培ったノウハウだけでなく、更に新たなアイデアを出すことにつながっている。
- ・本市では、高齢になってから地域の活動に参加したいと思っても、従来の参加者の輪には入りにくい等の意見がある。また、自分自身は高齢者扱いをされたくないのに参加したくないといった声もある。
- ・高齢になる前の50代や60代の早い段階で地域参加ができる仕組みを構築することが、外出する動機付けの一助となると考える。

---

※注1 Pay For Success の略。成果連動型民間委託契約方式のことで、自治体が民間事業者に事業を委託する際に、事業で解決すべき行政課題についての成果指標を設定し、支払額を成果指標の実現度合いに連動させる。

- ・介護予防事業への参加者募集のパンフレットには、従来の福祉事業で当たり前で使用していた「介護予防」「健康」という言葉が一切使われておらず、シニア層以外にも興味を持ってもらえるデザインとなっていた。
- ・多様性が問われている中でも、男性限定や女性限定のプログラムを準備している。特にイベント名に「男・本気」を入れることにより、課題である「男性の参加」を促す工夫を行っている。



「あ・し・た」プロジェクトのチラシ 一部抜粋

## ②岡山県岡山市「在宅介護総合特区（AAAシティおかやま）について」

岡山市では「高齢者が、介護が必要になっても住み慣れた地域で安心して暮らすことができる社会の構築」をコンセプトに、全国でも数少ない「在宅介護」に焦点を当てた総合特区（※注2）（AAAシティおかやま）を平成25年から実施している。

AAA=Ageless（エイジレス）、Active（アクティブ）、Advanced（アドバンスト）として、「AAA（トリプルエー）シティおかやま」を愛称として取組を進めている。

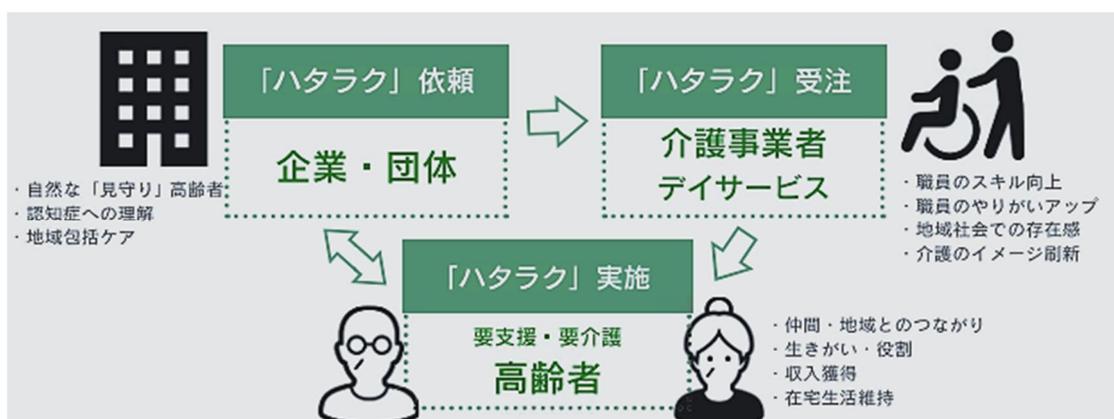
これまでに在宅サービスに特化した総合特区は全国でも例はなく、先進的な取組を実現することで超高齢社会を乗り越えることを目指している。

健康な高齢者の方には、ボランティア参加や就労的な活動の場が用意されているが、要介護状態となった場合、就労的な活動の場を提供している介護事業所は少ない。岡山市では、高齢者が要介護状態になっても、いつまでも住み慣れた地域で生きがいを持つ

※注2 総合特区とは、地域の様々な課題を解決するために定められた国の制度である。関係省庁と協議の上で従来の規制を緩和したり、全く新しい制度を実施したりといった特別な措置をその地域限定で実施することができるようになること。

て暮らしていけるように、介護事業所で就労・社会参加活動が可能となるような高齢者活躍推進事業「ハタラク」を実施している。

地域の企業や団体が介護事業所に掃除や内職などを依頼し、希望する高齢者がその人の意欲と能力に応じた就労的な活動を行っている。依頼者の中には、有償のボランティアとして小額の金銭や商品等を謝礼として渡している企業等もある。



### 「ハタラク」の仕組み

(「要支援・要介護になっても ハタラクガイド」より)

「ハタラク」 依頼	おかやまコープ		<p>非常にいきいきと作業していただきました。きっちりした仕上がりに満足しています。お渡しした有償ボランティア代で、店内のどら焼きを購入されたのですが、喜ばれる様子を見て、依頼して良かったと思っています。</p> <p>生活協同組合おかやまコープ コープ西大寺 店長 黒瀬修啓さん</p>
「ハタラク」 受注	介護事業所		
「ハタラク」 実施	草取り		

「ハタラク」 依頼	ヤマト運輸		<p>年齢を重ねても、みんなで楽しく過ごせる仕組みを作っていこう、というところに共感しました。地域の方に見守ってもらえたり、働きがいを感じてもらえるように、受け入れ体制を整えていきたいと思っています。</p> <p>ヤマト運輸 株式会社 岡山主管支店 岡山西大寺営業所 所長 藤井康典さん</p>
「ハタラク」 受注	介護事業所		
「ハタラク」 実施	DM 配達		

### 「ハタラク」の事例

(「要支援・要介護になっても ハタラクガイド」より)

### 委員からの主な意見

- ・ デイサービスの送迎の柔軟化として、デイサービスの送迎先を、利用者本人宅以外にも、親族宅を認める等、デイサービス利用の利便性を向上させ、自宅以外の場所への外出機会の創出にもつながると考える。
- ・ 外出機会の創出に向けて、高齢者活躍推進事業である「ハタラク」の取組が合致している。要介護者になっても、地域で働くことやボランティア活動をすることで、自己有用感を得られ、本人の生きがいにつながり、健康増進にも貢献すると考える。
- ・ 要介護者となった場合、家族や福祉事業者の協力がないと外出することが困難で、どうしても家に引きこもりがちになるが、「ハタラク」のような取組があれば、本人の意思を尊重し、外出することができ、なおかつ、人の役に立てるということが実現可能となっている。
- ・ 大府市でも要介護者の働く意思や、地域に貢献したいという思いを実現できるように、介護施設やハタラク先（企業など）に協力を得て、本市がつなぎ役を担い、要介護者の生きがいになるような活躍の場や外出する機会が必要である。

### ③夢のみずうみ村防府デイサービスセンター「高齢者にとって魅力的な外出先について」 (山口県<sup>ほうふ</sup>防府市)

夢のみずうみ村防府デイサービスセンターでは、在宅生活を継続したい、人生現役で過ごしたいと思っている方に、元気で過ごしてもらうためのたくさんの仕掛けを設けている。デイサービスセンターで過ごす時間を楽しむことが、自然とリハビリにつながるようにと考えられている。

運営方針は、「可能な限りその居宅において、その有する能力に応じて、自立した生活を営むことができるよう必要な日常生活上の世話及び機能訓練を行うことにより、利用者の社会的孤立感の解消及び心身機能の維持ならびに利用者の家族の身体的・精神的負担の軽減を図る」こととしている。

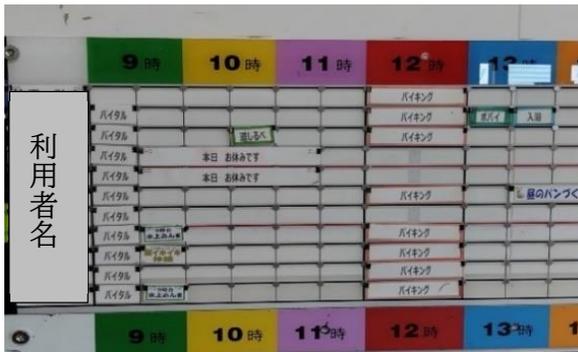
施設では、デイサービス内での一日の過ごし方を、それぞれの利用者が自分で決めるという特徴がある。施設では、豊富なプログラムメニューが準備され、訓練としてのリハビリにとどまらず、利用者が楽しみながら施設で過ごすことで、自然とリハビリにつながるような工夫がされている。また、過度な職員の介護による状態の悪化を防ぐため「バリアアリー」の考え方を導入している。

### 委員からの主な意見

- ・ 施設の職員は利用者それぞれの状態に配慮しつつ、できる能力を生かせるよう「バリアアリー」の考えを取り入れている。日常動作の維持・強化につながる取組として、非常に効果的ではないか。
- ・ 村内通貨「YUME（ユーメ）」については、稼ぐことも使うことも自由にでき、視察者の案内をすることでもユーメを得ることができる。村内通貨は、施設内の様々な

シーンに利用でき、他の方にコーヒーなどを振る舞うこともできる。村内通貨を多く稼ぐことにより、利用者本人の活動に対する満足度を高めている。

- ・ デイサービス等の介護施設については、介護が必要になる前から体験や見学ができるような配慮が本市としても必要ではないか。
- ・ 単にお金をかけるのではなく、利用者目線で様々な創意工夫を取り入れると高齢者が行きたくなる、外出したくなる魅力ある施設になるのではないか。



自分のスケジュールは自分で決める



村内通貨「YUME」

#### 4 本市に求められること

以上の調査研究の結果、高齢者の外出機会の創出について、従来の施策を更に推進していただけるよう、次の5点について提言を行う。

なお、それぞれの提言は関連し合っているため、内容の重複はあえて避けて記述する。

##### (1) 自己有用感が得られる環境づくり

高齢者となっても、働くことや、地域でのボランティア活動を通じて、自己有用感を得ることが、本人の生きがいにつながり、健康増進にも貢献すると考える。

地域の方や家族から本人に向け、「あなたに参加してほしい」、「あなたが必要だ」と伝えることで、外出の動機付けになるのではないだろうか。

要介護者となり、家族や福祉事業者など、周囲の協力がないと外出することが困難となった場合、自宅に引きこもりがちになる。そのような場合でも、外出を促すために、福祉事業者だけでなく、家族や企業などの協力が必要と考える。

また、外出した際に自己有用感を得る機会の創出のためには、行政が、要介護者の見守りを担ってくれるような福祉施設、企業等との橋渡し役となる必要がある。要介護者だけでなく、高齢になっても外出をきっかけに、自己有用感を得る体験をすることは、本人の満足度が増し、継続的な外出につながると考える。

## (2) 外出意欲につながるイベントと情報発信

外出先が魅力的で多様であれば、高齢者が自分の好みに合った場所に出掛ける意欲が湧く。現代社会において、多様性に対応する「人権を尊重した誰一人取り残さないまちづくりの実現」の考え方を重視する必要があるが、多様性に配慮しすぎて、各種イベントに誰でも参加可能となると、参加を促したい年代や性別などには届かず、主たる課題解決からは遠ざかってしまう。

多様性が問われている中でも、男性限定や女性限定等のターゲットを絞り込んだイベントを準備し、興味を持ってもらえるようなPRチラシの作成や各ターゲットに合った方法による情報の発信、インパクトのあるネーミングにする等の工夫も必要であると考ええる。

市民が求める多様な興味・関心に応えられるよう、種類の異なるイベントを準備し、選択肢を増やすことで、外出意欲を高めることができると考える。

## (3) 50代・60代の外出を促す動機づくり

前でも述べたが、高齢になってから地域の活動に参加したいと思っても、従来の参加者の輪に入りにくいことや、高齢者扱いをされたくないことを理由に参加したくないといった声がある。そういった課題の解決方法の一つとして、50代や60代の早い段階で地域参加ができる仕組みを構築することで、高齢になってもスムーズに地域で活動しやすくなり、継続的な外出につながるのではないかと考える。

地域活動が盛んな大府市においても、50代、60代のみを対象としたイベントが少ない。その年代に特化したイベントを開催するに当たっては、ターゲットが参加しやすいよう曜日や時間帯を考慮する必要がある。また、企業に勤めている人に対しては、定年後の生活をイメージさせる講座やウェブサイトを創設するなど、企業と連携して、退職後はどう過ごすかについて考える機会を提供することも有効であると考ええる。

また、市内の事業所に協力してもらい、従業員等に直接参加を働き掛けるようなことも必要である。さらに、参加して終わりではなく、その都度、イベント等の開催案内を通知し、次回以降は運営側となって参加してもらう等、継続的な活動となるための工夫が必要であると考ええる。

## (4) 高齢者の選択肢の見える化

通所型の介護サービスを利用しようとするとき、そこがどのような場所なのか、どのようなサービスがあるのか、施設内はどのようなになっているかなど、実際に利用する段階でないとわからない点も多い。家族もどのような基準で選べばよいかかわからない。通常は、要介護になった際にケアマネジャー等から様々な状況に鑑みて本人に合った施設やサービス内容の説明を受けることとなるが、事前に施設内の様子がわかるとよいと考える。

なお、通所型の介護サービス等の施設紹介ページについては、単なる施設紹介にとどまらず、利用に関しての注意点や申請方法、利用条件などもわかるように準備することで、市民サービスの向上につながるのではないかと考える。

#### (5) 外出する際には、各個人に応じた移動手段が必要

社会福祉協議会との情報交換や民生委員へのアンケート結果からもわかるように、高齢になってからの外出には公共交通などの目的地まで行く手段が必要となってくる。

高齢になってくれば、体力の低下に伴い、外出が億劫になったり、自動車の運転を控えたりする。また、運転免許を返納すれば、移動手段が減り、行動範囲も狭くなる。

高齢者の外出機会の創出には、公共交通を含めた移動手段を確保する必要があると考える。市内の公共交通を更に充実させる際には、高齢者の意見も取り入れて検討を進め、大府市の高齢者に合った公共交通機関網を検討していただきたい。

## 5 おわりに

「高齢者の外出機会の創出について」の調査研究をするに当たっては、テーマ選定の際に話題となった、委員の親の体験談が、委員同士が同じイメージを持つための具体的な例として大変役に立った。社交的ではない一人暮らしの高齢者が、外出を控えるようになり、足腰、さらには骨も弱くなっていたところ、骨折をしたことで医師からデイケアなどに通うことを勧められ外出するようになった。外出するようになってからは、顔色もよくなり、楽しそうに生活をしているとのことだった。

外出するきっかけは人によって様々であるが、周囲からの声掛けなど、何かのタイミングがあれば外出するようになる。高齢者に対しては、より多くの外出先の選択肢を準備して、個々に合ったものを選んでもらえるようにしておくことがよいと考える。

今後も多くの人が経験し、悩まれるであろう高齢者の外出について、いろいろな方の意見を聴きつつ研究ができたことで、改めて考える良い機会となった。

情報交換会やアンケート結果から、高齢者は、意識的に外出しているわけではなく、日常生活に必要な買物であったり、様々な場所で趣味を楽しんだり、仲間と世間話をして楽しんだりしている。

高齢者の外出の機会は、人それぞれであるが、健康に過ごすためには必要であり、そのためにも、外に出て活動することが大切となる。

本市としては、高齢者の生活の多様性を認識し、様々な支援と環境を整えることが重要である。「いつまでも 住み続けたい サステナブル健康都市おおぶ」として、高齢者が充実した人生を送ることができ、本市に住んで良かった、住み続けたいと思えるまちとなる施策を期待する。

最後に、当委員会の調査活動に御協力いただいた全ての方々に、この場をお借りしてお礼を申し上げ、本報告書の結びとする。

## 調査研究の経過

- (1) 令和6年5月13日（月） 厚生文教委員意見交換会
  - ・1年間の活動の流れについて、委員会で情報を共有した。
- (2) 令和6年5月30日（木） 厚生文教委員意見交換会
  - ・各委員から出された調査研究テーマ希望を基に協議を行った。
- (3) 令和6年6月14日（金） 厚生文教委員会
  - ・所管事務調査として「高齢者の外出機会の創出について」の調査を行うことに決定した。
- (4) 令和6年6月14日（金） 厚生文教委員意見交換会
  - ・今後のテーマ活動についての協議を行った。
- (5) 令和6年7月8日（月） 厚生文教委員意見交換会
  - ・今後のテーマ活動についての協議を行った。
- (6) 令和6年8月2日（金） 厚生文教委員勉強会（委員派遣）
  - ・福祉部長、高齢障がい支援課長、地域福祉課長を講師とした勉強会を行い、大府市における高齢者の外出機会の創出などについて資料を基に説明いただいた。
- (7) 令和6年8月5日（月） 民生委員へアンケート調査依頼
  - ・閉じこもりがちな高齢者の現状や特徴を調査するため、民生委員（役員）にアンケート協力の依頼を行った。
- (8) 令和6年8月8日（木） 厚生文教委員情報交換会（委員派遣）
  - ・大府市社会福祉協議会と高齢者の外出機会の創出についての情報交換を行った。
- (9) 令和6年8月8日（木） 厚生文教委員意見交換会
  - ・勉強会及び情報交換会を終えて、委員間で意見交換を行った。
- (10) 令和6年9月19日（木） 厚生文教委員意見交換会
  - ・情報交換会及び民生委員へのアンケート調査を終えて、委員間で意見交換を行った。
- (11) 令和6年10月21日（月） 厚生文教委員意見交換会
  - ・今後のテーマ活動についての協議を行った。

- (12) 令和6年11月5日(火)～7日(木) 厚生文教委員会行政視察(委員派遣)
- ・大阪府堺市「介護予防『あ・し・た』プロジェクトについて」
  - ・岡山県岡山市「在宅介護総合特区(AAAシティおかやま)について」
  - ・夢のみずうみ村防府デイサービスセンター「高齢者にとって魅力的な外出先について」
- (13) 令和6年11月15日(金) 厚生文教委員意見交換会
- ・視察後の意見交換を行い、委員間で先進地での取組について議論を行った。
  - ・テーマ活動全体会議について、委員間で事前確認を行った。
- (14) 令和6年11月22日(金) テーマ活動全体会議
- ・テーマ活動に関する中間報告を委員長から行い、報告内容に対し、委員外議員から質疑や意見をいただいた。
- (15) 令和6年12月19日(木) 厚生文教委員意見交換会
- ・テーマ活動全体会議で出された意見を参考に報告書の内容を検討した。
  - ・報告書の内容について委員間で協議した。
- (16) 令和7年1月17日(金) 厚生文教委員意見交換会
- ・報告書の内容について委員間で協議した。
- (17) 令和7年1月24日(金) 厚生文教委員意見交換会
- ・報告書の内容について委員間で協議した。
- (18) 令和7年2月5日(水) 厚生文教委員意見交換会
- ・報告書の内容について委員間で協議した。
- (19) 令和7年2月26日(水) 厚生文教委員意見交換会
- ・報告書の内容について委員間で協議した。
- (20) 令和7年3月10日(月) 厚生文教委員意見交換会
- ・報告書の内容について委員間で協議した。
- (21) 令和7年3月28日(金) 厚生文教委員会
- ・報告書の内容を決定し、本会議で報告することとした。

## 厚生文教委員会委員名簿

(令和6年5月13日～令和7年5月13日)

役職名	氏名	所属会派
委員長	野北 孝治	市民クラブ
副委員長	竹田 隆憲	親和クラブ
委員	加茂 康治	市民クラブ
委員	久永 和枝	日本共産党
委員	酒井 真二	親和クラブ
委員	鷹羽 琴美	親和クラブ

(備考)

正副委員長のほかは、議席番号順



夢のみずうみ村防府デイサービスセンターにて